

## 介護者からの声

体の動きで表現できる活動だったので、言語理解が難しい方も、周囲の助けを借りながら、表現ができていたのではないのでしょうか。

初めはワークショップの意義がわからなかったけれど、笑顔や周囲の反応を見て、スタッフにもよい効果があるのではないかと感じるようになりました。

お互いに苦手な相手もいると思いますが、演劇を通して意外な一面を知ること、関わり方を変えようかな、関わりを増やしていこうかな、と思えるのでは。

## 介護事業所のリーダーからの声

新たな一面の発見や、良いも悪いも含めた反応が、日常のケアのヒントになれば、と思います。

役や台詞が決まっている演劇だと、「間違えたくない」とハードルがあがってしまいがちですが、その場で活動を作り上げることに、可能性を感じました。

## 精神科医師(デイケア)からの声

例えば「黒豆の味見の真似をする」といったことを日常的なケアの現場ではなかなかやりませんが、「見立てて遊ぶ力」がそれぞれに自然に引き出される。驚く発見でした。

その人の能力の最大値が発見できると、そこに向かってケアを組み立てられます。最大値を見つける機会として外部からアーティストが入る意義があると感じました。

その人がより輝き、より良い条件で表現できるように、その人がやりたいと思ったことや心が動いたことを否定せず、丁寧に反応していくことが一番大切。演劇の再現性で記憶を刺激し、利用者さんはもちろん、スタッフも含めそこにいる全員でアートな時間と空間を楽しみます。

## アーティストからの声

## 実践までの流れ

1

### ご相談

施設ごとの目的意識、参加者の状況・人数、やってみたいジャンル(演劇・美術・音楽等)を伺い、内容や日程を調整します。

2

### 介護スタッフ向け事前ワークショップ

まずは介護スタッフのみなさまにワークショップを体験していただき、懸念点などを確認します。

3

### 実施

アーティストとスタッフが訪問し、ワークショップを実施。介護スタッフの方やご家族も一緒にお楽しみください。

4

### 振り返り

アーティスト、スタッフをまじえ、介護スタッフのみなさまで振り返り、ケアに活かせる点を話し合います。

アートワークショップに関するお問い合わせはこちら

NPO 法人ドネルモ

〒812-0026

福岡市博多区上川端町9-35リノベーションミュージアム冷泉荘 B45

TEL/FAX 092-409-5762 MAIL donnerlemot@gmail.com

研究・プロジェクトに関するお問い合わせはこちら

ラボラトリオ株式会社

〒810-0005

福岡市中央区清川2丁目4番地29号新高砂マンション208号

TEL 092-753-7059 FAX 092-510-7048 MAIL event@laboratorio-lp.com

## 認知症の方と介護者の方が

# 共に創る

# アートワークショップ



新しい「その人らしさ」が見えてくる

体を動かしたり、ちょっと「演じて」みたり：即興的なアートを楽しいむなかでは、いきいきとその人らしさが解放され、普段は見えづらい一面が見えてくることも。

「共に創るアートワークショップ」は、アーティスト、認知症の方、介護者(介護スタッフおよびご家族)と一緒にその場で創るアートワークショップです。

アートを通じた「この人ってこんな人だったんだ!」「こんな関わり方もアリなのかも」といった発見が、ケアする(介護者)ーされる(認知症の方)という関係性をこえ、今よりもっと心が通じ合うケアにつながります。



# 共に創るアートワークショップってどんなもの？

## ？どんな活動なの？

医療介護福祉施設にアーティストが訪れ、認知症の方や介護者とアートを楽しむ活動です。できあがった作品や決まったプログラムを楽しむのではなく、ちょっと演じてみたり、音を奏でたり。いろいろなジャンルがありますが、「共にその場で」という即興性を大切にしています。「できるかな」という不安は最初だけ。アーティストが参加者の反応を引き出し、気づけば笑顔や驚きがあふれる場になります。

### 非日常を楽しむ



アーティストが施設に来る！いつもとちがう空気が、みなさんをいきいきとさせ、五感を刺激。

### 新たな一面を発見する



普段物静かなのにめずらしい…！

即興的なアートを通じて、普段だと見えづらい一面や、潜在的な記憶が引き出されます。

### 日常のケアが変わる



認知症の方への親近感がさらに湧いたり、声かけやアクティビティのヒントを得られたりします。

## 重度認知症デイケアで行った演劇ワークショップの例

認知症の症状が重い方も、「うちの施設では難しいかな」という介護スタッフの方の心配をよそに、普段より活発な姿を見せてくださったり、昔の記憶が引き出されたりします。重度認知症デイケアでの実践例を紹介します。

### 第1回 演劇へのいざない



まずは、手遊びや、ぬいぐるみを使った簡単なワーク。ぬいぐるみに名前をつけ、好きなものや得意なことを紹介。

**POINT** どなたでも取り組みやすいプログラムにまずはチャレンジ。

### 第2回 それぞれの自由な表現へのアプローチ

「リトミックスカーフは、何に見える？」スカーフを手に、自由にポーズをとったり、てぬぐいや帽子、服に見立てたり。「かわいいー！」と歓声が。



**POINT** スカーフをどう見立て、扱うかは人それぞれ。普段のケアでは見えてきづらい、その人らしさやこれまでの人生経験がにじみ出て、ワークショップでの発見がその後の会話にもつながります。

### 第3回 表現を共に創る



「餅つきを手伝って」「黒豆はどうやって煮たらいいですか？」年末行事をテーマに、アーティストが呼びかけると…「もっと水を入れたいかん」「どれどれ、わたしが」と参加者の身体がいきいきと動き出す。

**POINT** いつもの空間に見えない白や杵、鍋が登場。認知症の方・介護者・アーティスト全員で、演劇の空間を楽しみます。

## プロジェクトメンバーに聞く /

## 「共に創るアートワークショップ」にはどんな可能性がありますか？

医療や介護の文脈で

認知症の方に関わる場合、どういった機能が損なわれているかという点に注目し、どうケアしてあげるか考えることになりがちです。しかし、アートワークショップを行うことで、損なわれた機能ではなく残っている健康な部分に注目することができます。アートという非日常の中でみられる新たな一面に周囲の人も驚かれると思います。そして、非日常での気づきを日常の関わりに生かしていきましょう。



たろうクリニック 院長

内田 直樹 UCHIDA NAOKI

九州大学大学院芸術工学研究院 准教授(芸術社会学)

中村 美亜 NAKAMURA MIA



アートと聞くと「なんだか難しそう」、「才能や経験がないと無理」と思われる方もいるかもしれませんが、違います。アートワークショップには、正しい／正しくないという決まりがないんです。認知症の方のほうが、普通の大人よりも創造的なことも少なくありません。知的な能力は衰えても、遊び心や感情は豊かだからでしょう。誰もが生き生きと、他人と関わる喜びを見つかることができるのがアートワークショップの醍醐味です。